

令和3年度 中学生「親になる」講座 実施報告書

(『親になる』講座と乳幼児ふれあい体験事業)

知多市児童センター



1. 事業目的

近年、社会の中で核家族化、少子化問題が深刻化し、子どもが成長する過程で、自分より小さな子どもや乳幼児に接する経験のないまま大人になる人が増えています。そのため、親になって初めて赤ちゃんと接することとなり、赤ちゃんを目の前にしてどう接して良いか戸惑う事も少なくありません。

本事業は、将来親となる世代の中学生を対象に、県が作成した『親と子のふれあい』DVDを活用し、学習講座を行います。その上で乳幼児親子と生きたふれあいを行うことにより、乳幼児や家庭を知り、他者への関心、共感の能力を高めるなど、生徒の健全育成を図ります。このように、将来の子育てに関する予備知識を得ることで、親になることへの期待や、自覚、責任の気持ちを育むことを目的としています。

令和3年度は感染症予防の観点から、乳幼児とのふれあいは中止とし、『親になる』講座と疑似体験を実施しました。

なお、本事業は国が乳幼児とふれあう取り組みを児童館の新たな取り組みとして位置づけており、市でも『第2期知多市子ども・子育て支援事業計画』の施策として位置づけています。



2. 実施校・開催日時等

実施校	開催日時	対象/人数	場所と実施形式
知多中学校	11/4（木）6限目 14：40～15：30	1年生全クラス 209人	体育館での 合同講座
東部中学校	11/11（木）6限目 14：35～15：25	1年3組 28人	教室での 講座

3. 内容

講座の前後に、赤ちゃんへの興味関心、また『親になる』ことに対してどう考えるかについて、アンケートを実施。（別紙 表1.2 参照）

① 『親と子の愛着』のDVD視聴

DVDを視聴し、『赤ちゃんについての知識』『夫婦が協力して子育てをすること』など、赤ちゃんの発達過程とその時期の親のかかわりについて知る。

② ～赤ちゃんから学ぼう～講座

実際のふれあいができないため、映像により、赤ちゃんのさまざまな生活シーンを取り上げ、子育てする親の思い、日々のかかわりが成長していく上でとても重要であることを知る。また、子育ての大変さについても知り、『親になる』ということが容易ではない事、興味や衝動だけで親になることが現実的ではないことも同時に学ぶ。

③ 【人形を使った模擬体験】

新生児標準体重3kgの人形を使用。

重さ、首がぐらつくことなどから、1つの命の重みを感じ、命を大切に扱わなければならないことを体験する。また、おむつ交換、肌着の着脱なども体験する。

④ 【妊婦ベストを着用した妊娠時疑似体験】

妊娠状態を疑似体験し、妊娠する事の大変さを体感する。



乳幼児親子との生きたふれあいができないかわりに、新生児人形を活用し、赤ちゃんの重さを体感して、抱くときには頭や首を支えなくてはならない事を体験した。また、今年度は新たに妊婦ベストを活用し、現実的な妊娠時の状態を理解させ、親になることの大変さを実感しました。

【知多中 （体育館での合同講座）】

広い会場の中 200 人を超える生徒に対し、想いを伝えることができるのか心配があったが、当日は中学校の協力の下、1 年生が体育館に集まり、講座と疑似体験を行いました。

疑似体験ではクラスごとに円形の隊形をとり、短時間で一人ひとりが人形を抱き、おむつ替えを体験しました。

初めのうちは緊張した面持ちで、人形を抱っこすることでさえ譲り合っていたが、他の生徒

が体験する様子を見て、先生自らが妊婦体験された感想を聞くことにより、興味を持ち積極的に体験を希望する様子が見られました。また、講座で聞いたことを生かし、抱き方、おむつや肌着の着せ方などを生徒同士で確認し、教え合うなど協力する様子が見られました。



【東部中 （教室での授業形式の講座）】

生徒の反応、表情を確認しながら講座を進めることができました。

模擬体験は、3.4人のグループで1体の人形を使い行いました。促されて恐る恐る抱き、一言「重っ。」と3kgという重さを実感し、早々に抱くことをやめる子がいれば、友達が体験している様子に笑顔を見せ、自身が満足しているような表情を見せる生徒も見られました。また、頭を大切そうに支えて抱き、そっとあやすように揺らして、おむつ替えを周りと相談しながら何度もやり直す男子や、赤ちゃんを抱いた数人が集まり、ママ友のようなやり取りをして、子育て中の気分を体験し楽しんでいる女子など、さまざまな場面が見られました。



講座では、動画で赤ちゃんの泣き声を聞き、『赤ちゃんは泣くのが仕事』だということ、赤ちゃんが泣くことにはそれぞれ意味があり、それを読み取り対応するお母さんに対して尊敬の念を抱き、そこから、自分の育ちを回顧したようです。「育ててくれた親に対し感謝の気持ちを感じた」という内容の感想が複数寄せられました。



5. アンケートの結果から

『親になる』講座の前後でアンケートを実施、気持ちの変化を比較しました。

【表1 赤ちゃんへの興味・関心について】

講座前は、興味・関心が「とてもある」「まあまあある」が50%、「あまりない」「ない」「わからない」「その他」が50%と半分に分かれていました。

令和元年度に行った同様のアンケートでは「興味ある」と回答した生徒が72%でした。今年度は赤ちゃんに対して興味・関心が低くなっています。これは核家族化により、身近で赤ちゃんと接する機会が減少していることが原因とも考えられます。また、例年、希望する小学校で実施してきた6年生対象の『赤ちゃんとのふれあい体験』がコロナで中止となり、6年生で赤ちゃんについて知識を得る機会がなく、身近に感じるができなかったのかもしれませんが。さらに、コロナ禍により家で過ごす時間が増えたことにより、他者への興味・関心が薄れているのだからかもしれません。

講座後の回答は、興味・関心が「とてもある」「まあまあある」について講座前の50%から26%増の76%となりました。「あまりない」「ない」他が講座前50%から講座後には24%となり、講座前に回答した人の約半数が今回の講座により興味関心を持つことができました。



【表2 「親になる」ということについて】

ほとんどの項目についてプラスのイメージが増えています。唯一、「将来、子どもが欲しい」との回答についてのみ体験前を下回りました。これは、子育ての大変さや親になる責任、また妊娠体験で知った妊婦の苦労や妊娠の大変さから、『親になる』ということに対して、



自覚や責任の気持ちを持ったことにより、

より、慎重な考え方をを持ったことによるものだと考えます。

「親

となるということは責任のあることで、軽々しい気持ちではいけないと思った。」というアンケート意見が見られました。



【別紙1 体験を終えた感想、気持ちの変化】

実際にふれあうことはできませんでしたが、赤ちゃんの泣きについて理解し、赤ちゃんへの考え方が前向きになるなど、成果を感じる事ができました。「泣く事には意味がある。それを読み取ろうとすることが大切。」「面倒なところもあるが、成長するところを見るのは楽しいかもしれない。」

さらに注目したいのは、疑似体験でありながら、自分の育ちを回顧し、育ててくれた親に対し

て感謝の気持ちを感じた生徒が多数いたことです。

「自分もこのように育てられてきたことを知り、ありがたく思った。」

「親のすごさや尊敬できる部分がわかった。」

「僕を育ててくれている両親のような親になりたい。」

「生んでくれた母を大切にしたい。」など。

なかには、「親を尊敬し感謝をしているものの、反発してしまう自分の気持ちが複雑」と、この年頃の複雑な気持ちを感じた生徒もありました。

6. まとめ

今年度は『親になる』講座のみの実施となりました。実際の親子とのふれあいができない分、講座の中で赤ちゃんの成長に伴う様々なシーン、親子のかかわりが具体的にわかるシーン等、動画を多く取り入れ、赤ちゃんについて具体的に知る機会となるよう、また改めて赤ちゃんのかわいらしさ、保護者のかかわりの大切さ、親の思い、親になる事などについて感じ取ることができるような内容にしました。



ふれあいの実体験はありませんでしたが、動画で「赤ちゃんの泣き声の変化」に気づく、「追いかけてくる姿に癒された。」など、見聞きすることで感じ取ることができたようです。

また、疑似体験では講座での学びを生かし、首を支えて静かに抱き上げるなど、慎重に扱うこと様子から、命の大切さを感じているようでした。疑似体験が私たちの予想を超えて生徒の心を揺さぶったことを強く感じました。



ふれあいをせず講座のみでどこまで成果が出るのか、また初の試みである集団での講座で、どこまで想いを伝えることができるのか不安がありました。アンケートを見る限りでは、ある程度の成果があったのではないかと考えます。

一度の体験では大きな成果は期待できないかもしれませんが。この体験が中学生にとって良い記憶として残り、将来自分の子どもを持ったときにこの講座を思い出し、なにか一つでも活かされるものがあることを願います。

